



三渚コラム 中国「津津有味」-14

私は毎週月曜日にネット上で「現代中国拡大鏡」という時事コラムを書いています。2001年に初めて、先日までで765号になります。その中で毎年一度は、前年の日中関係について全体的な動きを総括しますが、年によって多少の量の違いはあるものの、必ず目につくのが日本の良いところを吸収しよう、一言でいえば、「日本に学ぼう」と言う記事です。これは日中関係がかなり悪化しているときでも絶えることはありませんでした。さすがに、尖閣列島国有化後の最も険悪だった一時期は姿を消しましたが。しかし、これは過去の私のデータでは極めて異例で、それだけ中国側の受け止め方が深刻だった証左でもあります。言葉を変えれば日中関係を診断する一つのバロメーターとも言えましょう。

これに対し、日本の新聞記事で「中国に学ぶ」といった類の記事はまずお目にかかりません。日中関係がかなり良好な時でも、です。では、中国には日本が学ぶようなところはないかと言うと、掛値なしにたくさんあります。この点は私がいつも残念に思うところです。なぜ取り上げられないか、日本人は知らず知らずのうちにまだ中国を見下しているのかも知れません。わたくしはこの現象を一言で「日本人の島国根性」と表現しています。中国には「夜郎自大」「井底之蛙」などと言う四字成語がありますが（後者「井の中の蛙」は日本語にも入っています）、その点は大いに自省すべきでしょう。

四川大地震の時、中国当局が急いだのは新しい住居の建築でした。まだ遺体が残されている崩れた学校に土砂をかぶせてしまった行為は、悲嘆にくれる父母の姿とともに日本でも報道され、非難の的になりました。しかし、迅速な新しい村の建設で村人の紐帯が保たれ、郷土崩壊を相当程度未然に防ぐことができたことは評価すべきなのに、その点はほとんど報道されませんでした。むしろ、急ごしらえの新村の不備な点もつばらクローズアップされました。また、地域復興対策として実行された“対口支援”もほとんど報じられませんでした。これは、各地方自治体に対象支援地域を割り振って支援競争をするもので、言わば、木下藤吉郎の墨俣築城張りのやり方です。このやり方には二つの利点がありました。一つは競争でやるからスピーディーになる。もう一つは、支援地域を分割できるので、それぞれの地域の被害状況や地域の産業などの特殊性に応じて、柔軟に支援に必要な内容のプライオリティを変えることができたことです。

これを東日本大震災の支援と置き換えてみると、長短がはっきりわかります。遺族の心情を第一に、また、住民の意思を尊重して民主的に事を進めること自体は間違っていないんですが、必要以上に時間がかかり、その間に住民は分散せざるを得ず、共同体は崩壊し、仮設住宅では孤独死も相次ぎ、避難先で新しい生活に馴染んだ人の中には、郷里への期間をためらう人が年ごとに増え、6年経っても復興は途半ばです。

また、一律の支援は、山間・平地・海辺と言った各村々の特殊性に対する配慮が十分生かされず、支援する側とされる側の行き違いも生じました。震災直後、復興が語られた時、中国の“対口支援”に学ぼうという声もありましたが、無視されてしまいました。中国のやり方がベストかは議論もありますが、耳を傾ける謙虚さがなかったのは残念なことです。